安倍政権の教育は
“個人の尊厳”が全く抜け落ちた
国家主義・民族中心主義

――前川喜平さん鋭く批判――

松戸の憲法記念の集いで前川喜平さんが“安倍政権の教育”について語りました。(2019 年 5/5)

最初に「これからの戦争は国対国ではなく対テロであり、それなのに他人から恨みを買う集団的自衛権によってテロの対象になろうとしている。そんな集団的自衛権行使をする安保法制は憲法違反でもあるから私もシールズの後ろで反対の声をあげた」と個人としての考えに基づき行動をする自づからの姿勢を明らかにしました。

そして安倍政権は米国と一体でありその姿勢は“ネオ富国強兵政策”。其の内実は新自由主義・国家主義・自民族中心主義の教育だと批判しました。

国家の方が個人よりも価値があるといった戦前回帰の思考であり、日本民族中心主義は戦前の国体思想其のものである。それ故安倍政権は日本国憲法の基本である“世界人類の普遍的原理によって立つ”とは言わず“国柄”といった日本国憲法と相いれない言葉をよく使うのだと。

安倍政権の教育について安倍第一次政権時の教育基本法改悪から説明しました。

2006 年教育基本法が改定され①道徳・公共の精神・郷土を愛すると言った個人を超越する国家の存在（日本は特別の国）の考え②政治の教育への介入が盛り込まれたと。旧教育基本法の“国民全体に対して直接責任を取る”から“法律の定めによって”に変えられ法律を根拠に政治的に介入する道へと転換させたのだと。

2006 年の教育基本法の改定以降教育への政治介入が強まっている状況を分析。

教科書採択への政治介入によって教育現場の自主性の減少、全体主義・国家主義の人づくりの道徳の推進、性教育への圧力、歴史教育への圧力などを指摘しました。

性教育への圧力は「七生特別支援学校」での性教育に対して、東京都議会議員からの抗議に東京都教育委員会が応じる形で起こっています。しかし 2011 年の高裁判決で「東京都教育委員会の行為は基本法が禁止している不当介入である。損害賠償せよ」と、“教育委員会は外からの圧力に対し現場を守るのが役割だ”との司法の姿勢を示しました。

歴史教育への圧力

前川氏は「歴史修正主義＝歴史改ざん主義者である安倍政権は“日本は悪いことをしなかった”の視点で従軍慰安婦・南京虐殺・沖縄の集団自決への軍の関与を否定しているが、学問の自由の上で確定されたものをきちんと教えるべき」と政治介入でねじ曲げられている事を批判。

又、“梅雨空に九条守れと女性デモ”といった俳句ですら公民館に掲示させない事案を出し“政治的中立性・公平性”が政権・権力を批判しないために使われている地方自治体の実状も批判。そして“メディアは嘘を嘘というべきで、真実を伝えるのが公平なのです”とメディアが取るべき姿勢を示唆しました。

道徳教育

道徳の教科化とは検定教科書使用義務と成績をつける義務が生ずることであると指摘。其の教科となった道徳の内容が“父母への敬意”“残業することはいいこと”“黙って食事をしなさい“といった内容でそこには地球全体の課題への意識は全くなく、しかも個人の尊厳の視点が全く抜け落ちていると批判。そして日本国憲法が一番大切にしている「個人の尊厳の尊重」から基本的人権も平和主義も導き出されていると指摘しました。更に、前川氏は親への孝の次は天皇への尊敬”忠“が盛り込まれ教育勅語が持ち出されるのでは・・と問題提起しました。

自民党の改憲案の一つ“教育の無償化”の項目は“国の未来を切り開く目的”云々の文言が入っており、まさに政府・権力の意に沿うものだけに手厚い支援をする内容となっており政治による介入そのものと批判。

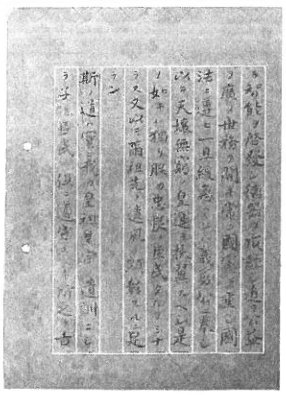
平和主義についてはユネスコ憲章「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」を示し無知であることから戦争への道が。だから隣の人から学ぶ、ベトナム戦争やパリ不戦条約などの歴史を学ぶ大切さを語りました。

会場からの質問に答える形で加計学園についても語りました。

獣医学部を加計学園に決定した過程を見ると①国家戦略特区としての審査なく不公正②ライバルの京都産業大学は京都大との連携も出されていたのにH30年開校の条件を出されて断念。不公平③加計ありきの様子が愛媛県の報告にあるのに文書が無い不透明さ、がありまさに首相案件であったことが明らかだと指摘しました。

“民主主義と自治そして平和主義”ふじしろ政夫 047-445-9144

＊４月８日以降の活動報告はホームページ「ｅ-鎌ケ谷ふじしろ政夫」に



教育勅語